

PETRONAS SYNTIUM TEAM

PETRONAS SYNTIUM TEAM REPORT

スーパー耐久シリーズ2008
第2戦「ハイランドスーパー耐久レース」
2008年5月17-18日

■予選:5月17日 天候:曇り一時雨のち晴れ 気温19°C(午後1時現在)

第2戦を迎えたスーパー耐久シリーズ。今回舞台となるのは、宮城県・仙台ハイランド。1周4km強のコースはタイトなコーナーが多く、ドライバーにとっては“忙しい”サーキットのひとつでもある。

今回、PETRONAS SYNTIUMチームではドライバー編成を一部変更。28号車に今季初参戦となる谷口信輝をADライバーに迎え、Bドライバーとして前回チームに初優勝をもたらした片岡龍也がステアリングを握ることとなった。一方、50号車はおなじみのファリーク・ハイルマンと柳田真孝のコンビがドライブ。今回は2台揃っての好成績を狙う。

午前中は青空が顔を出していた仙台ハイランド。だが、午後1時20分からの予選が近づくとつれ、次第に雲行きが怪しくなってきた。風は冷たく、そしてときにはポツリと雨が落ちるといふ不安定な天候の中、まずはADドライバーによる15分の予選が始まった。

先にコースインしたのは50号車。ハイルマンが刻んだベストタイムは1分50秒001。一時は暫定トップとなり、最終的には3番手に落ち着いた。そしてこれを追うようにアタックに向かったのが28号車。谷口にとっては3年ぶりのS耐フル参戦であり、かつBMW Z4 COUPEでのレースは初めてとなる。事前にもてぎで行われたテストでは数周のみの走行だったため、レースウィークの2日間で周回を重ねてアタックを迎えたが、難なく1分48秒644をマークしてコースレコードを更新。ハイルマンに代わってトップへと浮上した。

午後2時5分、Bドライバーによる予選がスタート。28号車に乗り込んだ片岡は、早々にピットロード出口で待機。予選開始とともにコースイン、計測2周目にはベストタイムとなる1分48秒922をマークして、トップに躍り出た。一方、柳田は開始5分後にコースイン。だがアウトラップ走行中、1台のマシンがコースアウトし、クラッシュ。この車両回収のため赤旗が出され、予選が一時中断した。

この時点で、ライバルとのタイム差から判断し、ポールポジションをほぼ手中に入れたと確信した28号車は再開後のアタックを見送り、ピットで待機。逆に50号車の柳田はベストラップを狙い、再びコースへ。セミファイナルアタックで1分49秒133をマークした。ところが、赤旗後のアタックへ向かう際、ひと足早くピットロード出口で待機していたことがペナルティの対象となり、惜しくもベストラップ抹消に。しかしながら、次の2番目のベストタイム1分49秒237も、谷口や片岡と同様にコースレコード更新の好タイム。結果、A、B両ドライバーの合算タイムによって、28号車が今季初ポールポジションを獲得。50号車は2番手となり、PETRONAS SYNTIUM BMW Z4M COUPEの2台はフロントロー独占に成功した。

■決勝:5月18日 天候:晴れ 気温22°C(午後12時40分現在)

決勝日の仙台ハイランドは朝から青空が広がり、爽やかな天候に恵まれた。PETRONAS SYNTIUMチームでは、朝のフリー走行でドライバー交代やピットでのルーティンワークの確認などをメインに行い、決勝に向けて次第に士気を高めていった。また、決勝を前にしたピットウォークでは、この日、誕生日を迎えた谷口と同月5日生まれの片岡の両選手をバースデーケーキでお祝い。ファンからも祝福を受けた。

午後12時40分、26台のマシンによって124週の決勝レースがスタート。風もやや強くなり、上空の一部が薄曇へと変わったが、幸いにも終始安定した天候でレースが進んでいった。

クリアスタートを切ったポールポジションの28号車・片岡と、50号車・柳田。きれいに隊列を組んで快調に周回を重ねていく。序盤には一度柳田が片岡をパス、トップを奪うと2台は着かず離れずの距離で走行したが、再び片岡がトップを奪還。以後、2台ともコンスタントラップを刻んでの走行を展開した。

レースの約3分の1が終わると、3位以下を1分近く引き離すひとり舞台ならぬふたり舞台。そんななかで迎えた最初のルーティンは、42周目。50号車がまずピットへと戻ってきた。柳田からハイルマンへとスイッチ、併せてタイヤ交換と給油を済ませてコースへ復帰。その作業が済むやいなや、今度は28号車がピットイン。こちらも谷口へとドライバー交代し、タイヤ交換、そして給油作業を無事に終えた。

PETRONAS SYNTIUM TEAM

28号車・谷口と50号車・ハイルマンはそれぞれコンスタントな走りを見せる一方で、2台揃ってチェッカー・フラッグを受け取るべく、クルマに負荷をかけないドライビングを強く意識。特にハイルマンは、「縁石に乗らないように、朝のフリー走行からかなり意識して走るようにしていた」とチームからのアドバイスを忠実に守る走りに徹していた。

そして、終盤に迎えた2度目のルーティンワーク。当初、28、50号車ともにドライバー交代を予定していたが、マシンも快調であり、必要最小限のピット作業で済ませられることから、両ドライバーの続投が決定。50号車が84周終了時点で、また28号車は90周を終えてそれぞれピットインを行い、スタッフによるスムーズな作業を済ませ再びコースへと向かった。

2台はこのまま順調に周回数を重ね、トップ28号車・谷口は、2位の50号車に20秒以上の差をつけて快走。その50号車・ハイルマンも、最後までミスなく走破。ついに、PETRONAS SYNTIUM BMW Z4M COUPEの2台が1-2フィニッシュ！ 待望の勝利を果たしただけでなく、28号車・谷口も自らの手でバースデー・ウインのチェッカーを受けることとなった。

●鈴木哲雄監督

無事にワン・ツーフィニッシュを飾ることができて良かったです。ホッとしました。28号車はキャリアのある2人がドライブしていたので安心して見ていられましたし、50号車は柳田がまとめ、ファリークが最後までしっかりと良く走りました。彼はまだまだこれから成長する余地がありますので、今後もっと頑張ってもらいたいですね。作戦通りのレース展開ができましたので、今日の流れを大事に、これからもチームとして頑張っていきたいと思います。

●No.50 PETRONAS SYNTIUM BMW Z4M COUPE

F・ハイルマン

無事にチェッカーを受けられるよう、とにかくクルマを労わりながら走るようにとアドバイスを受けました。縁石にクルマを乗せずに走るのには僕にとって大変難しいことでしたが、とにかく気をつけてドライブするようになりました。いつもはマー（柳田）が最後のステイントを担当しますが、今回、頑張れると思ったので、2ステイントを走らせてもらいました。マレーシアに比べたら暑さも気にならなかったし、最後までいいペースで走ることができました。ただクルマのことが心配で、残り10周くらいはそれが気になって走りに集中するのが難しかったくらいです。今回1-2フィニッシュできたのはうれしいですが、次は僕たちが表彰台の真ん中に上られるようなレースをしたいと思います。

柳田真孝

予選も決勝も予定どおりの走りができました。開幕戦で結果が残せなかったのが、今回はとにかくクルマを最後まで走らせて結果を残したいという強い気持ちでレースに挑みました。序盤は28号車の片岡さんとバトルも楽しみましたが、あとはクルマを労わる走りに切り替え、大事に周回を重ねました。チームとして1-2フィニッシュを飾れたのはうれしいですが、やはり優勝するまでは本当のうれしさは取っておきたいと思います。

●No.28 PETRONAS SYNTIUM BMW Z4M COUPE

谷口信輝

久々のS耐で、いきなり優勝できたのは嬉しいですね。それだけクルマが良かった。とはいえ、開幕戦でのトラブルを聞いていたので、クルマが壊れないように縁石には乗らず、丁寧なレースを心がけました。BMW Z4は素直で乗りやすいし、楽しいクルマです。片岡とのコンビでのレースだったので、勝たなきゃいけないというプレッシャーもありましたが、今日はバースデー・ウインもできて良かったです。

片岡龍也

すべて予定どおり。無理なく、自分達の仕事をやり遂げることができてよかったです。クールスーツを用意しましたが、暑さも気にならなかったし、丁寧に走ることを意識して周回を重ねました。当初はボクが最後のステイントを担当する予定でしたが、ちょうど谷口さんが誕生日だったので、チームスタッフと相談し、バースデープレゼントということで走ってもらいました。次の富士は（ル・マン24時間レース参戦のため）お休みになるので、谷口さんと吉田に頑張ってもらいたいですね。

次回 第3戦 富士スピードウェイ

6月14-15日